

2025 年映画のベスト 10 表彰式に参加  
第 99 回キネマ旬報ベスト・テン&個人賞発表

上原 昇（2組）

年が明けると、前年度公開された映画のベストテンがメディアで報道されます。

世界一歴史があるといわれる第 99 回キネマ旬報ベスト 10 も 2 月 5 日に発表がありました。さっそくベスト・テン特集号を買って、折り込み葉書で表彰式の応募をしたら招待状が届きました。

2 月 19 日（木）の夜、会場の渋谷 Bunkamura オーチャードホールに行ってきました。この表彰式に参加するのは 4 回目になりますが、当日、30 分ほど前に着くと、これまで見たことのない大勢の人が会場の周りを延々と待っています。

どうやら映画『国宝』と主演の吉沢亮の人気に依るもののようです。

以下が、2025 年、主な受賞作（者）です。

- ◆日本映画ベスト 1 『旅と日々』（『国宝』と僅差で 1 位、監督の三宅唱は昨年の『夜明けのすべて』に続き 2 年連続のベスト 1）
- ◆外国映画ベスト 1 『ワン・バトル・アフター・アナザー』残念ながら私はまだ観ていません。最近の洋画は題名が長くて分かりにくい。
- ◆主演女優賞 シム・ウンギョン（『旅と日々』による）主演賞の二人は同じ 1994 年生まれの 32 歳、今後の日本と韓国の映画界を牽引
- ◆主演男優賞 吉沢 亮 （『国宝』、『ババンババンバンパイ』による）
- ◆助演女優賞 伊東 蒼 （『今日の空が一番好き、とまだ言えない僕は』による）
- ◆助演男優賞 佐藤二郎（『爆弾』ほかによる）芸能人には珍しい信州大学経済学部卒の名バイプレイヤー
- ◆日本映画監督賞 李 双日<sup>イ サンイル</sup> （『国宝』による）在日朝鮮人 3 世の李監督は三度目のベスト 1 獲得
- ◆外国映画監督賞 ポール・トーマス・アンダーソン（『ワン・バトル・アフター・アナザー』による）
- ◆文化映画 『よみがえる声』（朴壽南、朴麻衣監督、二人は母娘で在日朝鮮人 2 世の壽南監督は 92 歳）
- ◆日本映画脚本賞 奥寺佐渡子 （『国宝』による）
- ◆読者賞 秦 早穂子（「シネマ・エッセイ記憶の影から」による）今年 95 歳になる秦は 1959 年に J.L.ゴダール監督のデビュー作『勝手にしやがれ』を世界で初めて買い付けた人



ベスト・テン特集号表紙



受賞のスピーチをする吉沢亮

25年の映画界は日本映画製作連盟（映連）の発表によると、映画館入場者は1億8,875人で前年比130.7%、興行収入（興収）も2,744億円（同132.6%）と過去最高となりました。公開作品は邦画が694本、洋画が611本で邦画が優勢となりましたが、これだけの本数となると、とてもすべてを観ることができません。

邦画の興収ベスト3は、1位『鬼滅の刃』391億円、2位『国宝』195億円、3位『名探偵コナン』147億円。

『国宝』は昨年6月に公開されてから今年に入っても上映されていて、興収200億円を突破し、劇映画では過去最高記録を更新しました。「国宝、観たか？」は流行語にもなり、一種の社会現象となっています。表彰式で『国宝』の李監督は「200億円もですが、1,400万人が観てくれたことが嬉しい」と言っていました。

年初に歌舞伎座で歌舞伎観劇をしましたが、いつもより若い世代の観客が増えているようで、これも「国宝」効果ではないでしょうか。

<https://news.yahoo.co.jp/articles/41fcfaa40fe2f598af80488592200f9141d0a14b?page=2>

表彰式に登場した人たちは映画界の多様性を映していて、女性と韓国に縁のある人の活躍が目立っています。多様性といえば、映画はシアターで観るものという我々世代の常識を覆す配信作品が話題を集めています。

劇場公開を前提としていない配信作品をベストテンなどでどう扱うかは難しい問題で、賞レースのためだけの限定公開もみられるようです。

今年の映画界はどんな一年になるでしょうか。

（2026年2月20日記）

以上